



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カント徳理論の再構成と応用可能性：有徳な人の感情と人間以外の存在に対する道徳的配慮の観点から
Author(s)	清水, 颯
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16967号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16967
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99811
Type	doctoral thesis
File Information	Hayate_Shimizu_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 清水 颯

審査委員	主査	教授	田口	茂
	副査	准教授	宮園	健吾
	副査	准教授	眞鍋	智裕
	副査	教授	藏田	伸雄（創価大学）

学位論文題名

カント徳理論の再構成と応用可能性

——有徳な人の感情と人間以外の存在に対する道徳的配慮の観点から——

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、『道徳の形而上学』第二部を中心的なテキストとして、カント倫理学における「徳」の理論を研究し、そこから主要な特徴を抽出することによって、従来理性のみに偏って感情を軽視していると見なされてきたカント倫理学のなかに、人間の感情、ならびにそれと道徳との関係に関する繊細で豊かな分析が含まれていることを示し、それによって従来のカント像を修正しつつ、カント的な倫理学のより成熟したあり方を提示している。従来（とりわけ批判者から）、感情を抑圧して理性のみに従うべきと主張する一面的な理性主義の義務論と捉えられてきたカント倫理学が、自己や他者の感情に対するバランスのとれた配慮を示しており、そのなかで「有徳さ」の現実的なあり方を構想していたことが論じられる。

本論文はさらに、動物倫理とロボット倫理という現代の応用倫理学の重要問題に対して、上記のようにアップデートされたカント倫理学が重要な寄与を果たしうるという点を論じている。従来、典型的なカント理解のもとでは、非理性的存在者、例えば動物やロボットなどは道徳的行為者ではないため、道徳的配慮の対象ではないとみなされてきた。しかし、カントの徳理論を考慮に入れるなら、「動物への配慮」や「ロボットへの配慮」を求める倫理規範を構築することは十分に可能であると本論文は主張し、近年の関連文献を広く参照しながら、その道筋を提示している。

本論文の学術的成果をまとめるならば、主に以下の三点が挙げられる。

第一に、従来あまり顧みられてこなかったカントの徳論（『道徳の形而上学』第二部）を詳細に検討し、そこでの議論を筋道立てて整理することによって、カント倫理学が単に理性のみに偏り感情を軽視した一面的な理論であるという教科書的でカリカチュア化されたカント像を崩し、むしろカントの徳論のなかに、義務遂行において感情といかに向き合うかについての繊細で行き届いた配慮が見られるということを説得的に示している。また、理性と感情の対立は、道徳において問題となる事柄を炙り出すための議論の方法（分離の方法）としては強制的に用いられるが、実際に道徳を遂行する際の有効なあり方を描き出す際には、むしろ感情を適切に扱うことでそれを制御するという現実的な「有徳者」像をカントが提示しているという点を論証することに一定の成功を収めている。

第二に、単にこれまで顧みられなかったカントの徳論に光を当てただけにとどまらず、その理論を、従来からカント倫理学の核心と見なされてきた『道徳形而上学の基礎づけ』『実践理性批判』における叙述と緊密に組み合わせ、一見すると矛盾すると思われてきたカント的義務論と徳理論的な方向性とは矛盾なく接合され、一つの統一的な像を描きうることを示した点が挙げられる。さらに本研究は、『実践理性批判』および『判断力批判』における「尊敬」と「崇高」の感情を引き合いに出しつつ、「理性的感情」が不快を媒介とした快という複合的な構造をもつことを示すことによって、義務遂行においても快活でありうるという有徳な人の感情的状態を的確に構造化して示している。

第三に、動物倫理・ロボット倫理という現代における最先端の応用倫理的トピックに関し、カント倫理学が一つの有効な視座を与えうるということを示した点が挙げられる。関連する先行研究を幅広く渉猟し、それらを適切に吟味した上で、カント倫理学が人間以外の存在者に対する道徳的配慮を基礎づける論点を含むという点を論証している。本論文第一部の理論的考察を基盤とすることによって、従来論じられた間接義務にもとづく議論を超える積極的な議論を提示している。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文には、すでに発表された3報の査読付き論文が組み込まれており、背景には7報の査読付き論文がある。これらの論文や学会発表により、清水氏はすでにカント研究者としても応用倫理学研究者としてもそれぞれの学会で一目置かれる存在となっており、本論文の議論の水準も博士論文として十分であることが確認された。

審査委員会では、研究史の統一的な叙述が欠けているという点が指摘されたが、先行研究は各所で幅広く言及され吟味されており、上記の指摘は本論文の価値を根本的に毀損するものではない。口頭試問では、カントの共感概念がmindreading的に解釈されていないか、カント倫理学の基本的枠組みを弱めていないか、理性のコントロールが弱まっているという解釈なのか、といった質問に対し、清水氏は適切に返答し、本論文の学術的背景に関する知識や見解が十分なものであることが確認された。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。